

「回想」と「写生文」

— 後期漱石文学試論 —

山下航正

序

文学テクストには、ある一定方向への時間が流れており、ストーリーは多くその時間軸に沿って語られていくものである。しかし漱石の『心』（大正三年四月～八月）においては、語られている事象の時間（時制）は必ずしも時間軸に沿って提出されておらず、むしろ時間軸を整理した読みが必要とされる。その原因の一つに、『心』の特徴の一つである、「回想」による語りが挙げられよう。この「回想」は、「過去」を語るために用いられる手法であり、客観性、いわば「語る対象との距離」が関わっているために、語り手の語る「過去」への視線、あるいは意識の在り方が問われるものである。そして、私は、この語る「過去」への視線、あるいは意識の在り方という点に、対象認識の在り方を説いた「写生文」とのつながりを見出すのである。

漱石研究における「写生文」研究について、佐藤泰正氏は次のように記している。

「草枕」を初期作品の終結部と呼ぶ時、同時にそれは漱石における写生文の実験の、ひとつの終結と呼ぶこともできよう。また

写生文の効用については「現時の小説及び文章に付て」（明38・8）ほか初期の文中に散見できるが、写生文への批判に対して、写生文は「幼稚どころか却て進歩発達したもの」（「文章一口話」明39・11）というべきだという主張に、その文体観の何たるか、また後年の「道草」への成熟に至る必然を明らかに読みとることができよう。（注1。傍線は山下、以下同）

また、玉置邦男氏は次のように言う。

強いていえば、写生文と漱石との緊密な関連性を検討することなしには、初期漱石の輪郭も見えてこない。初期漱石の作品構造の分析と解明に着手するとき、子規・虚子との邂逅の実相は深い意味を帯びてくるといえる。（注2）

これらの見解等に共通して表れているように、それは多く初期作品において研究されているのが現状である。佐藤氏の論に見える、「後年の『道草』への成熟に至る必然」という箇所も、その関連性を解説するまでには及んでいない。この、漱石研究における「写生文」の問題に関して、「回想」の概念を導入することにより、新たな後期漱石文学の像を提出しようというのが本稿の目的である。

一 「写生文」の概念

まず、「写生文」の規定から考えていきたい。「写生文」は、文章革新運動を展開した正岡子規が唱えたもので、その主張が、「叙事文」(注3)の中に表されている。

文章の面白さにも様々あれども古文雅語などを用ゐて言葉のかざりを主としたるはこゝに言はず。將た作者の理想などたくみに述べて趣向の珍しきを主としたる文もこゝに言はず。こゝに言はんと欲する所は世の中に現れ來りたる事物(天然界にても人間界にても)を寫して面白き文章を作る法なり。

或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、それを文章に直して讀者をして己と同様に面白く感ぜしめんとするには、言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず只ありのまゝ見たるまゝに其事物を模寫するを可とす。

子規の説く「写生文」は、「言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず只ありのまゝ見たるまゝに其事物を模寫するを可とす」という、技法として捉えたものであつた。子規と密接な関係があつた漱石も、子規門下の『ホトトギス』派と自然主義文学との対立の中、「文章一口話」(注4)において自己の見解を示している。

Art for art は、文章若くは絵画を斯く分解して之を技巧的のみ観じ得る程、吾人の頭腦が発達した時に始めて勃興すべき現象であつて、又必ず起らねばならぬ一派である。其れで今の所謂写生文家には大に此傾向がある。此傾向のあるのは時勢の發展上斯ういふ一派が認められるべき機運に到着したので、一方から

云うと寧ろ社会が之を産出するまでに進んで來たのである。

(中略)

前述の次第だから所謂写生文は現今の社会からは頗る輕蔑されて、何等の価値もない者の様に言はれてゐるに拘はらず自分はさうは思はぬ。日本人の全体、今の所謂小説家などの多分の思ふ如く、写生文は短くて幼稚だと言ふのは誤りで、幼稚どころか却て進歩發達したものと云ふても然るべき事と考へてゐる。

「写生文」は、「時勢の發展上」産出したもので、現在「斯ういふ一派が認められるべき機運に到着し」ており、「写生文は短くて幼稚だと言ふのは誤りで、幼稚どころか却て進歩發達したものと云ふても然るべき」であるという、「写生文」擁護の立場を示すものである。そして、自らも「写生文」論を提示した。すなわち、『写生文』(注5)である。

写生文と普通の文章との差違を算へ來ると色々ある。色々あるうちで余の尤も要点だと考へるにも関らず誰も説き及んだ事のないのは作者の心的状態である。他の点は此一源泉より流露するのであるから、此源頭に向かつて工夫を下せば他は悉く刃を迎へて向ふから解決を促がす訳である。

(中略)

写生文家の人事に対する態度は貴人が賤者を視るの態度ではない。賢者が愚者を見るの態度でもない。君子が小人を視るの態度でもない。男が女を視、女が男を視るの態度でもない。つまり大人が小供を視るの態度である。両親が児童に対するの態度である。世人はさう思ふて居るまい。写生文家自身もさう思ふて居るまい。

しかし解剖すれば遂にこゝに帰着して仕舞ふ。

(中略)

写生文家は自己の精神の幾分を割いて人事を視る。余す所は常に遊んでゐる。遊んでゐる所がある以上は、写すわれと、写さるゝ彼との間に一致する所と同時に離れて居る局部があると云ふ意味になる。全部がびたりと一致せぬ以上は写さるゝ彼になり切つて、彼を写す訳には行かぬ。依然として彼我の境を有して、我の見地から彼を描かなければならぬ。是に於いて写生文家の描写は多くの場合に於て客観的である。大人は小児を理解する。然し全然小児に成り済ます訳には行かぬ。小児の喜怒哀楽を写す場合には勢客観的でなければならぬ。こゝに客観的と云ふは我を写すにあらざる彼を写すといふ態度を意味するのである。

(圈点は本文による)

漱石は、「写生文」の要素として「作者の心的状態」に着目し、その重要性を「大人が小児を視るの態度」「客観的」という語で説明している。これは、安森敏隆氏が言うように(注6)、「子規が提示した『叙事文』の写生の概念を内包しながらも漱石自身の文体を確立させる漱石の写生文」、つまり独自の「写生文」観であった。「写生文」の問題を、子規が「どのように書くか」と捉えたのに対して、漱石は「語るべき対象との距離」と捉えた。すなわち、作家の側の問題という角度から解決しようとしたのである。

整理すれば、漱石の「写生文」観、つまり「大人が小児を視るの態度」「客観的」といった語で表されたものは、(語る対象との距離のあり方を示唆するもの)と解釈することができる(注7)。これは、先

に見た「回想」の手法とまさに共通するものである。

二 「回想」による語り

「回想」を漱石の小説に探ってみると、『坑夫』(明治四十一年一月〜四月)、『心』、『道草』(大正四年六月〜九月)の三つが挙げられる。これらのテクストを分析していくことにより、「回想」への転換によつて「写生文」を深化させようとした作家の意図、またその実践としての、『坑夫』、『心』、『道草』が見えて来よう。

まずは、冒頭でも触れた『心』について見ていく。

私は月の末に東京へ帰つた。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずつと前であつた。私は先生と別れる時に、「是から折々御宅へ伺つても宜ござんすか」と聞いた。先生は単簡にたゞ「えゝ入らつしやい」と云つた丈であつた。其時分の私は先生と余程懇意になつた積でゐたので、先生からもう少し濃かな言葉を予期して掛つたのである。それで此物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私は斯ういふ事によく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いてゐる様でもあり、又全く気が付かない様でもあつた。私は又軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかつた。寧ろそれとは反対で、不安に揺かされる度に、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、何時か眼の前に満足に現はれて来るだらうと思つた。私は若かつた。けれども凡ての人間に対して、若い血

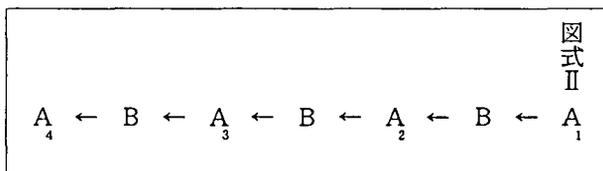
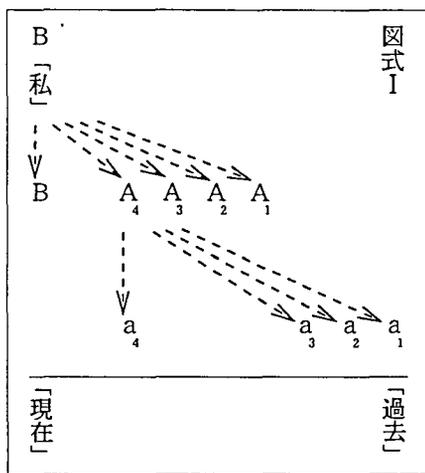
が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に対して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌つてゐたのではなかつたのである。先生が私に示した時々の素気ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠けやうとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づかうとする人間に、近づく程の価値のないものだから止せといふ警告を与へたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まづ自分を軽蔑してゐたものと見える。

私は無論先生を訪ねる積で東京へ歸つて来た。歸つてから授業の始まる迄にはまだ二週間の日数があるので、其うちに一度行つて置かうと思つた。

(四)

鎌倉で「先生」と出会い、帰京するまでを述べた箇所である。第一段落は、事実としての「私」や「先生」の言動が語られている。そして第二段落では、その事実を、語つてゐる「現在」から眺めて何らかの意味を付与しようとしてゐる、あるいは當時を読者に解説してゐる「私」がうかがえる。それが最も現れてゐるのが、傍線部の「私は若かつた。」あるいは「先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて来た。」という言説であり、後に続く第三段落では、また語る内容が「過去」へと戻つてゐる。

これを図示したものが、次のⅠ、Ⅱの図である。



図式Ⅰの実線は、「過去」から「現在」への時間の流れを表し、複数の、Aは語られている「過去」を、Bは語られている「現在」、「現在」での語り手の意識を表している。そして、語り手である「私」は、それらを俯瞰するような位置、Bに存在する。また、『心』の「下先生と遺書」に注目すると、最後部A₄がこれに当たり、下層aで表すことにより、『心』というテキスト全体と同じ回想構造が指摘できる。なお、A、aは、テキスト内では時間的な長さに差があり、また実際には多く設定すべきものであるが、便宜上このように表しておく。そして、図式Ⅱは、それらがどのような順序でテキストで語られてい

るかを示している。

まずテクストの冒頭で、「私」と「先生」が過ぎていた「過去」について語ることが示され、当時の出来事が語られていく。その途中、当時を「現在」から振り返って分析するような言説が挿入されつつ、「過去」へと戻っていく。このような語りが繰り返し行われていくのである。作家が「回想」を強く意識していたことによるものと考えられる。

『坑夫』でも、同様の語りを展開されている。

そこで平生の自分なら、何故坑夫になれば結構なんだとか、どうして坑夫より下等なものがあるんだとか、自分は儲ける事許を目的に働く人間ぢやないとか、儲けさへすりや何処がいゝんだとか、何とか蚊とか理窟を捏ねて、出来る丈自己を主張しなければ堪弁しない所を、只大人しく控へて居た。口丈大人しいのではない、腹の中から丸で抵抗する気が出なかつたのである。(九)

何でも此の時の自分は、単に働けばいゝと云ふ事丈を考へて居たらしい。苟しくも働かさへすれば、——苟しくも此のふわふわの魂が五体のうちに、うるつきながらも居られさへすれば——要するに死に切れないものを、強て殺して仕舞ふほどの無理を冒さない以上は、坑夫以上だらうが、坑夫以下だらうが、儲からうが、儲かるまいが、頓と問題にならなかつたものと見える。(中略)

其の上坑夫と聞いた時、何んとなく嬉しい心持がした。自分は第一に死ぬかも知れないと云ふ決心で自宅を飛び出したのである。夫れが第二には死なゝくつても好いから人の居ない所へ行きたいと移つて来た。それがまた何時の間にか移つて、第三にはと

もかくも働かうと変化しちまつた。所で、さて働くとなると、並の働き方よりも第二に近い方がいゝ、一步進めて云へば第一に縁故のある方が望ましい。第一、第二、第三と知らぬ間に心變りとした様なものゝ、変りつゝ進んで来た、心の状態は、有耶無耶の間に縁を引いて、擦れ落ちながらも、振り返つて、故の所を慕ひつゝ押されて行くのである。(中略)坑夫は自分に取つて天職である。——と茲所まで明瞭には無論考へなかつたが、只坑夫と聞いた時、何となく陰気な心持がして、其の陰気が又何となく嬉しかつた。今思ひ出してみると、矢つ張りどうあつても他人の事としか受け取れない。

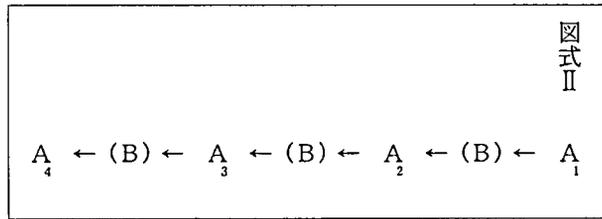
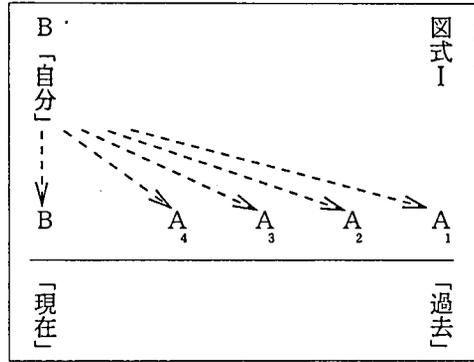
そこで自分はど、てら、に向かつてかう云つた。

「僕は一生懸命に働く積ですが、坑夫にして呉れるでせうか」

(十。傍点は本文による)

「自分」が、「ど、てら」からの「坑夫」の勧誘を受け、それに応じる場面である。「九」までは、「何とか蚊とか理窟を捏ねて、出来る丈自己を主張しなければ堪弁しない所を、只大人しく控へて居た。口丈大人しいのではない、腹の中から丸で抵抗する気が出なかつたのである。」と、「過去」の「自分」の状態を語っている。しかし、これに続く「十」では、「何でも此の時の自分は、単に働けばいゝと云ふ事丈を考へて居たらしい。」や、「今思ひ出してみると、矢つ張りどうあつても他人の事としか受け取れない。」というように、語り手は「現在」から「過去」を振り返って語っている。そして、「現在」から「過去」が眺められた後、語る内容は「過去」に戻り、「自分」と「ど、てら」の会話が展開されていく。

これらを図式化すれば次のようである。



『坑夫』では、『心』ほどには「回想」による手法が前景化されてはいない。そのためBの要素は薄く、図式Ⅱは右のように表すことができる。しかし、漱石の談話『坑夫』の作為と自然派伝記派の交渉（注8）を見ると、『坑夫』における「回想」の手法の導入という作家の意図は明瞭である。つまり、作家は語り手の「現在」|| Bを意識していたのである。漱石は次のように言う。

あれに出てる坑夫は、無論私が好い加減に作った想像のものである。坑夫の年齢は十九歳だが、十九の人としちや受取れぬ事が

書いてある。だから現実の事件は済んで、それを後から回顧し、何年か前のことを記憶して書いてゐる体となつてゐる。（中略）昔のことを回顧していると公平に書ける。それから昔の事を批評しながら書ける。善い所も悪い所も同じやうな眼を以て見て書ける。一方ぢや熱が醒めてる代りに、一方ぢや、さア何と云つて好いかい角を取ることが出来る。それは併しある人々には氣に入らんだらう。

『坑夫』の語りを「現実の事件は済んで、それを後から回顧し、何年か前のことを記憶して書いてゐる体」と解説し、続いて「昔のことを回顧していると公平に書ける。それから昔の事を批評しながら書ける。善い所も悪い所も、同じやうな眼を以て見て書ける。」と述べている。ここから、漱石が『坑夫』において「回想」の手法を導入したこと、すなわち、「公平」と「同じやうな眼」というところに、前に見た「客観的」にかかわる意味合いが見てとれる。「写生文」の方法の一つの表れである。しかし『坑夫』の場合、Bの視点はやはり少し淡い。『坑夫』と『心』の二つのテキストの差違は、テキストが発表された明治四十一年と大正三年という時間的な差違がその間にあり、『坑夫』の図式Ⅰから『心』の図式Ⅰへの移行からうかがえる、そこで行われたであろう「回想」を使った語りの深化を物語るものであるかも知れない。

『道草』になると、これらの二つのテキスト以上に、「回想」が前面に押し出されている。

「芝といふと、たしか御藤さんの姉さんに当る方の御嫁に入ら

しつた所でしたね」

「いえ妹で、姉はないんです」

「はあ」

「要三丈は死にましたが、あとの姉妹はみんな好い所へ片付いてね、仕合せですよ。そら惣領のは、多分知つておいでだらう、〇〇へ行つたんです」

〇〇といふ名前は成程健三に耳新しいものではなかつた。然しそれはもう余程前に死んだ人であつた。

「あとが女と子供ばかりで困るもんだから、何かにつけて、叔父さん叔父さんで重宝がられましてね。それに近頃は宅に手入をするので監督の必要が出来たものだから、殆ど毎日のやうに此処の前を通ります」

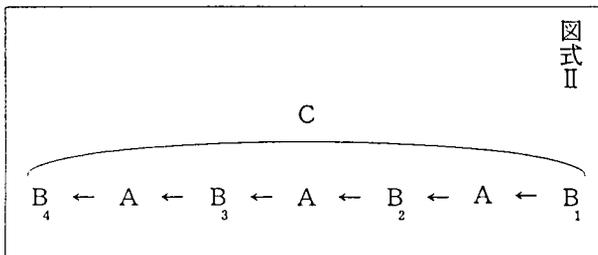
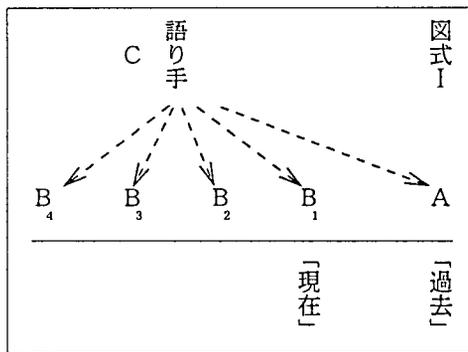
健三は昔此男につれられて、池の端の本屋で法帖を買つて貰つた事をわれ知らず思ひ出した。たとひ一銭でも二銭でも負けさせなければ物を買つた例のない此人は、其時も僅か五厘の釣銭を取るべく店先へ腰を卸して頑として動かなかつた。董其昌の折手本を抱へて傍に佇立んでゐる彼に取つては其態度が如何にも見苦しくまた不愉快であつた。

「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だらう」
健三は斯う考へながら、島田の顔を見て苦笑を洩らした。しかし島田は一向それに気が付かないらしくつた。 (十六)

これは、物語の主人公である健三と、彼の養父であつた島田との会話のシーンである。その中に、健三の回想が挿入されている。傍線部以前は、「現在」における健三と島田との会話である。その後も会話

は続いているのであろうが、その間に突如として、「健三」の回想が挿入されている。「健三は昔此男につれられて、池の端の本屋で法帖を買つて貰つた事をわれ知らず思ひ出した。」に始まる段落である。このような健三の回想は、健三と他の登場人物、彼の姉や兄、彼の細君との会話、また、健三がなにかを思考しているような場面など、テクストの至るところに挿入されている。

この『道草』の語りを図式化すると次のようである。それは「心」や『坑夫』とは幾分異なつたものになる。



まず、語られる物語の中心は「現代」に置かれ、「過去」の「回想」

がそのところどころに挿入される。図式Iでは、語り手と主人公が一致していないため、健三の物語を語る語り手は、これまでのようなBではなく、Cによって表される。このCは、Bに合わせて、つまり物語の時間に沿って移動していく。そして、複数の「過去」は、その各所に応じて回想され、語られる。それは時間軸にあわせて正確に配列することが困難であるため、今は「過去」の総体として、それらをAで表す。図式IIでは、B₁、A、B₂という順序で展開されている物語を、登場人物から離れた地平で、距離をとって全体を俯瞰する語り手、Cの存在が確認できる。

このように、『抗夫』『心』『道草』における「回想」の形式は、深化しつつ展開されている。かつ、これら三つのテクストには、「回想」という点では共通しながらも、それぞれの差異、独自性がうかがわれるのである。

三 「回想」と人称

三つのテクストの差異の意味について、人称という点から分析してみる。ここで確認しておくが、「回想」とは、過去を語るための手法であり、客観性や対象との距離が関わるために、語り手の語る「過去」への視線、あるいは意識の在り方が問われるものである。そして、登場人物と語り手が一致する一人称回想小説では、自己批判、あるいは自己弁護的な語りを展開されるのに対して、語り手と登場人物が一致しない三人称回想小説では、客観的、第三者的な語りを展開される。この、語り手と登場人物との一致、という点に即して言うならば、先

の三つのテクストでは、『心』と『抗夫』が一人称回想に、『道草』が三人称回想にあたる。そこでの客観化は、進むと言えるのである。それぞれのテクストに関して考察した論考で、人称にふれるもの、あるいは人称の点から述べられるものがある。まず『抗夫』について、小森陽一氏が次のように言及している。

その特異さは、一言で言えば、回想的手記の書き方を基本的に支えている、手記を書く現在の自己から、手記に書かれている自己を対象化するという在り方を、不可能なものに追い込んでいくところにあります。一見すると漱石の言っていることは、過去の自己を客観的に対象化するうえでの最も模範的なやり方のように感じられますが、この三つを同時に実現することは、逆に、いわゆる客観的な対象化を不可能にしてしまうことになります。

(中略)

もちろんすぐれた一人称回想小説は、一見安定して振り返られているかに見える過去の叙述の中に亀裂が入り、そのことをとおして書く主体のゆらぎが発生するような仕掛けが必ずしてあります。それは一人称回想小説が、その人称性ゆえに、過去の自己と現在の自己とが同じ人格として連続性があるかのような感触を作り出しやすく、また語り書く時点における自己の存在が強く喚起されるからにはかなりません。振り返られている過去の自分と、それを回顧する自分がつながっている以上、回顧する自分が生きているのであれば、そこには確実に生の時間が流れており、その中で回顧する自己は変容する可能性に常にさらされており、そうであればこそ安定した一定の超越的高みからの回想は不可能であ

る、ということが透けて見えてしまうのです。

『出来事としての読むこと』(注9)

「漱石の言っている「三つ」のことは、『坑夫』の作為と自然派伝記派の交渉」中の「昔のことを回顧すると公平に書ける。それから昔の事を批評しながら書ける。善い所も悪い所も、同じやうな眼を以て見て書ける。」を指し、小森氏はこれについて、右記のように「振り返られている過去の自分と、それを回顧する自分がつながっている以上、回顧する自分が生きていたのであれば、そこには確実に生の時間が流れており、その中で回顧する自己は変容する可能性に常にさらされており、そうであればこそ安定した一定の超越的高みからの回想は不可能である」という見解を示している。つまり、一人称回想小説では、語り手が客観的な「眼」を持つこと、換言すれば、漱石の「写生文」の概念を実施するのは、不可能であるということ述べているのである。

また小森氏は、『心』についても次のように説いている。

このわずかな数行(『心』の冒頭―引用者)の表現は、その短さにかかわらず、「下」における「先生」の遺書の表現構造全体を差異化するものとなっている。「先生」は最も核心的な告白を、「私は其友達の名を此所にKと呼んでおきます」(下―十九)と書きはじめていた。まさに「先生」は、自分の心に決定的な刻印を残した親友のことを、「K」という「餘所々々しい頭文字」を使って書き記したのであった。

(中略)

しかしまた、この表現(『心』の冒頭―引用者)からは、「先生」

という存在に対する否定や批判の調子を感じ得ることもできない。むしろそれは、「先生」という存在への、全面的な共感を印象づける働きをしている。そして「私」が言葉を発する身振りは、「先生」の行為を反復するものである。一方で「先生」という存在全体に共振り同調し、その生を反復しながら、他方「先生」が残した「遺書」の書き方(そこにおいて言葉化されている他者とかかわり方、他者をめぐる記憶||過去のあり方)に対しては徹底して差異化する。そうした一種シリーズ化したテクストの相互運動、シリーズ化した人格と言葉の相互運動が「こゝろ」という小説の基本的な特質である。

『心』における反転する〈手記〉(注10)

『心』における語りは、『先生』という存在に対する否定や批判ではなく、『下』における『先生』の遺書の表現構造全体を差異化する」ために、つまり『先生』という存在全体に共振り同調し、その生を反復すると同時に、『先生』が「遺書」で行った回想という行為、『先生』が残した「遺書」の書き方(そこにおいて言葉化されている他者とかかわり方、他者をめぐる記憶||過去のあり方)に対しては徹底して差異化する」ためのものである、という見解である。これは、語りの面から考えれば、語り手である「私」の、『先生』という存在全体への「共振り」「同調」という点での部分的な破綻であり、『心』にも存在する、「写生文」の試みとしての「回想」の方法とその限界を示しているのである。

小森氏は、『坑夫』において、「振り返られている過去の自分と、それを回顧する自分」とのつながりという、登場人物と語り手の一致、

人称の問題をつかみ、漱石が行ったであろう「回想」による語りの実験とその限界を指摘している。そして、『心』においても、同様の、「回想」による語りの実験とその限界という見解を内包した結論を導き出しているのである。

『道草』に関しては、金子明雄氏による指摘がある。

正確に言えば、登場人物の意識に即した語りは健三の場合が圧倒的に多く、他の登場人物の場合、ほとんどが彼の意識と対照されるかたちで示される。それも細君の場合はしばしば見出せるものの、他の登場人物は希である。また、健三以外の人物が過去を回想することも少ない。そして、ほとんどの場面に健三は登場しているから、小説世界が彼の意識によって塗りつぶされる印象が生じるのも無理はないのだ。にもかかわらず、語りによる批判的言説は健三に向けられる場合が多い。

(中略)

潜在的「一人称小説」という仮説には、テクストの書き換えやテクスト外の情報の導入はない。健三を物語言説の語り手に想定して読むだけのことである。重要なのは人称それ自体ではなく、それによって導入される語る私と語られる私という対象構造と、語る現在と語られる過去という時間の枠組みである。(注11)

金子氏は、『道草』においては、健三という「登場人物の意識に即した」語りが「圧倒的に多」いにもかかわらず、「語りによる批判的言説は健三に向けられる場合が多い」と述べる。つまり、『道草』は、語り手と登場人物が一致しない三人称回想小説であるが、そこには自己批判的な語りが存在している、ということを明らかにし、この点か

ら、『道草』に一人称小説的な要素を見出し、「潜在的一人称小説」であるという仮説を提示している。すなわち、「写生文」の更なる具現としての、「回想」の手法を用いながらの実験であるという見解である。

『坑夫』、『心』、『道草』というテクストは、語り手と登場人物の一致という人称の問題においては、一見すると相違がうかがわれよう。しかし、各テクストの細部を分析することにより、テクストに通底する、一人称回想小説的な要素を見出すことができる。三論に通底するのは、「回想」の手法の導入とその限界の指摘である。それは、「写生文」を実現するための、作家の試みの足跡を表出させるものでもあろう。

四 「回想」と「写生文」

明治四十年以前は、漱石は「写生文家」を擁護するような見解を示していた。それは、「文章一口話」で見たとおりである。しかし、『写生文』や安森氏の見解(注6参照)で確認したように、漱石の「写生文」は、子規が「叙事文」において示した「口ありのまゝ見たるまゝ」を内包しつつも、別の切り口、「作者の心的状態」や「大人たいじんが小供を視るの態度」「客観的」から説こうとするものであった。しかし、このことに関して限界を感じ取っていたことも事実である。「客観描写」と印象描写(注12)で示される、「純客観の叙述なるものは科学以外には殆んどあり得べからざる事」という見解は、そのことを確証づけるものである。

そして、純客観のねらいとその限界を見据え、その問題の解決・克服のために漱石が着目したのが、語るべき対象との距離を実現できる、「回想」という手法だったのである。それ故、「彼岸過迄に附て」(注13)を記した明治四十五年時点では、「自分の作物が固定した色に染

付けられてゐるといふ自信を持ち得ない、「自分が自分である以上は、自然派でなからうが、象徴派でなからうが、乃至ネオの附く浪漫派でなからうが全く構はない」という自己の立場を表明している。ここには、自己の文学的立場の表明のみならず、漱石が『ホトトギス』系流の作家たちの文学と自己の文学との差異、つまりある部分においての訣別を示そうとした意図も含まれているようにも思われる。

漱石は、まず『坑夫』に、「自分」という語り手自身の「過去を批評しながら」「善い所も悪い所も、同じやうな眼を以て見て書」くための一人称回想小説という手法を用いた。しかし、小森氏が指摘するような、「安定した一定の超越的高みからの回想は不可能」という限界を感じ取り、『心』においては、「私」という語り手自身についてではなく、「先生」という、小森氏の言うように他の人物について語るための一人称回想小説を試作した。さらに、語るべき対象への距離・客観性、自己の「写生文」をより一層深めるために、『道草』において、三人称による回想という方法を選択した。それは、結果的には一人称小説的な要素、金子氏の言う「潜在的一人称小説」という要素を孕むことになった。これらの作品は、すべて、漱石にとつての「写生文」、漱石の志向する「大人が小供を視るの態度」「客観的」を実現するための、一連の実験過程であつたと言えよう。

結

対象をいかに語るかという問題に対し、漱石は認識の在り方という箇所に着目した。そしてその方法を求め、子規が提唱した「写生文」から出発し、「作家の心的状態」を経て、「回想」に至つたのである。佐藤泰正氏が「後年の『道草』への成熟に至る必然」と述べているように、『道草』やその他後期の小品に「写生文」との関連を見出すことも、この点から考えれば可能になってくる。しかし氏のこういった指摘を含むこれまでの考究は、漱石の「写生文」の変容・深化を見る上で、出発点と帰着点を明らかにしているに過ぎなかつたのも事実である。それは同時に、後期作品間のつながりを、例えば三部作といったモチーフを主とする、限定された範囲でのみ把握することでもあつたのだ。私は、それらに対して、「回想」という手法を導入し、それを様々に変化させ、自己の「写生文」を深化させようとした漱石を見出すのである。漱石研究の一つの道具である「写生文」に、「回想」との通路を付与することは、後期漱石文学を解明するための有効な方法になりうるのではないだろうか。

注

- 1 佐藤泰正「漱石表現事典 写生文」(『夏目漱石必携Ⅱ』別冊国文学 No 14、昭和五十七年五月十日、学燈社)。
- 2 玉置邦雄「漱石作家論事典 写生文」(『夏目漱石事典』別冊国文学 No 39、平成二年七月十日、学燈社)。

- 3 『日本』付録週報、明治三十三年一月二十九日。
- 4 『ポトトギス』十巻二号、明治三十九年十一月一日。
- 5 『読売新聞』、明治四十年一月二十日。なお、本稿では、概念としての写生文を「写生文」、漱石の写生文論を『写生文』として区別している。
- 6 「漱石と子規の写生——『写生文』と『叙事文』」（『漱石研究』第7号、平成八年十二月十日、翰林書房）
- 7 「写生文」に関して、鈴木章弘氏による言及がある（「商標としての『写生文』」、『漱石研究』第7号（注6参照））。鈴木氏は、子規本人が「写生文」の文字を使用したのは一回のみであること、子規生前中に使用されたのも三回であることから、「写生文」が、高浜虚子、坂本四方太ら『ポトトギス』派の「広告としての機能」を持たされた「商標」であると説く。しかし、本論は漱石の「写生文」の概念と実践を明らかにするものであり、「写生文」そのものの言及ではない。
- 8 『文章世界』三巻五号、明治四十一年四月十五日。
- 9 平成八年三月十五日、東京大学出版会。
- 10 『構造としての語り』（平成元年四月三十日、新曜社。原題「『こころ』を生成する『心臓』」（『成城国文学』第一号、昭和六十年三月二十三日）。
- 11 「三人称回想小説としての『道草』」（『漱石研究』第4号、平成七年五月二十日、翰林書房）。
- 12 『東京朝日新聞』、明治四十三年二月一日。
- 13 『東京朝日新聞』・『大阪朝日新聞』、明治四十五年一月一日。

〔付記〕

本文の漱石の引用は新版『漱石全集』（岩波書店）に、子規の引用は『子規全集』（講談社）に拠った。なお、本稿は平成十年度広島大学国語国文学会春期研究集会（平成十年六月二十一日、於広島大学）での口頭発表を基にしている。

（やました こうせい）